

12

広隆寺

右京区

京福電車太秦（うずまき）の駅を降りると、正面に荘厳な広隆寺（ひろたか）の姿があります。山門横には国宝第一号とかかれた弥勒菩薩半伽思惟像（みろくぼんがしゆい）の写真が飾られています。アルカイック・スマイルと呼ばれる柔らかな微笑みをうかべたこの弥勒菩薩像は、人々から最も愛されてる仏像の一つです。

『日本書紀』によると、推古天皇十一年（六〇三年）に秦河勝（あきのか）が聖徳太子からもらい受けた仏像をまつるために寺を造ったのが、広隆寺のはじまりであるとされています。ただし創建の頃の場所は現在地とは異なっていたようです。

秦氏は、五世紀後半に朝鮮半島東南部の新羅（しら）から移住してきた渡来系氏族です。その最も特徴的な性格は、葛野大堰（かしのおおい）による嵯峨野開拓に代表される土木工事に長けたことですが（『人権ゆかりの地をたずねて』葛野大堰の頁参照）、その他にも養蚕（ようさん）・機織りに巧みであったという伝承をもち、大化改新以前の朝廷の蔵を管理する実務官としても活躍しています。殖産興業に卓越した能力をもつ秦氏は、大和朝廷の統一国家形成の進展に合わせて、六世紀に入ってから朝廷直轄領の屯倉（みやげ）の経営に関わる形で畿内から地方へと勢力をのびし、地方に住む渡来人を組織していった（彼らは「秦の民」「秦人」とよばれました。）と考えられています。

広隆寺のある葛野（かしの）（京都盆地西部地域）は、その秦氏の根拠地でした。寺の周辺の太秦という地名は、秦氏の長の別称です。また、広隆寺境内にある大酒神社の神は古くは「大辟（おおい）の神」、中世には「大裂明神」といわれ、土地を割いて治水灌漑（かんがい）を行った秦氏の事績をたたえる名と考えられます。平安京遷都も、背景には在地の秦氏の経済力や土木技術がありました。

広隆寺の弥勒菩薩半伽思惟像は、韓国の国立中央博物館にある金銅の弥勒菩薩像に瓜二つであることから、古代の朝鮮文化の伝播を示すものとされています。高い技術で産業を興した秦氏の事績と在地に生きた共生の姿とともに、古代の国家間における文化交流の一場面を知ることができます。

（菅澤庸子）



広隆寺

メモ●「広隆寺」は、三条通太秦（右京区太秦峰岡町）で、京都バス「太秦広隆寺前」、京福電鉄「太秦駅」下車すぐ、JR「太秦駅」より徒歩20分